鹿児島県小中学校長研究大会　分科会記録

○　日　時　令和６年11月15日（金）12:35～14:00

○　分科会Ⅰ　中学校　第５分科会

「開かれた学校づくり」

○　研究主題

「家庭や地域の信頼に応える『開かれた学校』づくり

○　協議題

「地域社会と連携した信頼される学校づくりの推進」

○　発表者　南さつま立坊津学園　本山　和仁

○　司会者　南さつま立万世中学校　神田　良文

○　記録者　南さつま立金峰学園　内村　健二

【質疑応答】

（質問：岳南中　永野　由可里）

・　以前，地域から協力をいただいていた「読み聞かせ」などは，今も続いているか。

在職中，とても効果的な取組であると思っていた。

（応答：坊津学園　本山　和仁）

・　今現在も，継続して地域の協力をもらっている。他にも多数，継続している教育活動は多い。

（感想：紫原中　伊口　秀樹）

・　在職していた６年前と変わらず，今も継続して充実した地域連携が進んでいることをうれしく思う。子供が減少傾向の中，学校が地域との連携を深めていくことで義務教育学校のよさをさらに引き出してほしい。

（質問：加世田中　藤野　義久）

・　学校運営協議員と生徒，保護者，職員の関わりはどうか。

（応答：坊津学園　本山　和仁）

・　授業参観などで児童生徒に声かけなどをしていただいてはいるが，直接，児童生徒や職員との語り合いの場を設定してはいない。保護者との会も開いてはいないが，学校運営協議会のメンバーにPTA役員を入れているため，PTA のことについては，協力ができる体制にはなっている。

（質問：宮之城中　古里　和彦）

・　登校班会議の運営はどのように行われているか。また，地域の方が，校舎内に花を生けに来られるとのことであったが，花代はどうしているのか。

（応答：坊津学園　本山　和仁）

・　スクールガードや防犯協会の方と子供，職員が一緒に安全指導を行っている。花については，ボランティアで活動していただいている。庭で育てているものや野に咲く花等を持ってきていただき，生けてもらっている。

【グループ討議後の班ごとの発表】

（G班：加世田中　藤野　義久）

・　学校運営協議員と生徒，職員との関わりについて，全校朝会等で話をしてもらっている。

学校運営協議会は，委員の選定が重要である。学校の応援者であるという立場を理解した委員で構成されることが望ましい。

（H班：川内南中　松本　眞一）

・　学校運営協議会との連携については，校務分掌にしっかりと位置付け，取組の内容を周知することが大切である。

生徒会の取組について，学校運営協議会の中で子供に発表させたことは効果的であった。

（応答：坊津学園　本山　和仁）

・　学校運営協議会が校長の学校経営方針に賛同し，「一緒に学校を創造していこう。」といった同じ方向性で取り組む姿勢が求められる。やはり，「人」が大事であると考える。また，現在はPTA会員ではない方々を会員として呼び込むことも一定の効果が上がっている。地域からは，職員の地域行事への参加等をはじめ，学校への要望等も多いが，校長がじっくりと考え，一つ一つにフィルターをかけ，内容としてどうか，時間はどうか，職員の負担にはならないかなど判断する必要がある。

これまで児童生徒も多くの活動に充実感を味わい，感謝している。また，その子供たちの活動する姿が家庭や地域の信頼へとつながっていく。これからも，学校，家庭，地域など一体となって子供たちを育むことを継続していきたい。また，今日，ご意見いただいたことを参考に，家庭や地域の信頼に応える『開かれた学校』づくりを推進していきたい。

（記録　金峰学園　内村　健二）

鹿児島県小中学校長研究大会　分科会記録

○　日　時　令和６年11月15日（金）14:15～15:35

○　分科会Ⅱ　中学校　第５分科会

「開かれた学校づくり」

○　研究主題

「家庭や地域の信頼に応える『開かれた学校』づくり」

○　協議題

「教育課程の自己点検・自己評価等と学校関係者評価（外部評価）の充実」

○　発表者　薩摩川内市立祁答院中学校　末留健太郎

○　司会者　薩摩川内市立川内南中学校　松本　眞一

○　記録者　薩摩川内市立　入来中学校　石畑　浩一

○　分科会当日の発表について

大会要録の117ページに示されたＡ校区の実践の中から，特に祁答院中学校での取組を中心に発表した。特に地域の信頼に応えるため，学校運営協議会から発せられた通学路の危険箇所改善について陳情書を作成して上申し，危険箇所解消につなげた。この実績から学校運営協議会との信頼関係を深めることができた。さらに祁答院中で R5 からの防災教育研究の成果であるワークショップの手法で安全マップを新たに作り出す作業を進め，経過を学校運営協議会便りに掲載し地域に広報することで，職員や生徒と学校運営協議会の連携例を示せた。

【質疑応答】

（質問：輝北中　堀内　隆史）

・学校運営協議会委員のアンケートからも，地域が廃れてしまう危機感が感じられた。そのような地域の思いや要望をしっかり受け止めようとされた校長の姿勢が素晴らしかった。真似していきたい。

（応答：祁答院中　末留健太郎）

・校区小学校の合併のタイミングをよいきっかけにして動くことができた。堀内教頭のがんばりに助けられた。

（質問：紫原中　伊口　秀樹）

・学校運営協議会は校長から独立していたり，リーダーシップを取れているか？

（応答：祁答院中　末留健太郎）

・コロナ前は独自で動く感じがあったらしい。現在は学校への協力態勢はある。今後，触れ合う時間を作り，交流性を高めたい。

（応答：川内南中　松本　眞一）

・坊津学園のように系統的・組織的でない。学校運営協議会と学校の関係はウインウインでなく，学校が地域貢献で生徒を出して，地域だけがウインの状態だ。

（質問：加世田中　藤野　義久）

・協議会便りは誰が，年に何回出しているのか？

（応答：祁答院中　末留健太郎）

・事務局校長が，年５回。小学校再編便りから移行。

【グループ討議後の班ごとの発表】

（Ａ班：郡山中　岩元　邦俊）

・学校関係者評価が無難な回答になりがちで積極改善につながらない。記名制にするかどうか等，事前検討が必要だ。

（Ｂ班：大崎中　吉留　雅樹）

・評価項目の質問文，尋ね方に留意が必要。CS の会の夜間開催ばかりではよくないので，昼開催を検討中。大崎中ではCS 出前講座が年１回あり，300 人ちょっとの生徒が 20 講座に分かれて体験させてもらう，ありがたい行事がある。他に生徒会と CS のランチミーティングもある。関連で，鹿児島市の中学校の実例でPTA 参加率が保護者 20%，教職員 50%の所があるとのことで心配だ。

（Ｃ班：紫原中　伊口　秀樹）

・学校運営協議会の委員の中には，学校教育をあまり知らない方もいらっしゃるので，評価をしてもらう前に学校をより多く見てもらう必要がある。紫原中では委員に県民週間に授業参観案内をしたが，10名中２名の参加にとどまった。

（Ｄ班：黒神中　野村　浩二）

・発表の中に，Ｃ校の実践として学校運営協議会にて主任格の職員に自分の担当分野についての報告をさせた取組が紹介されていたが，職員の意識改革につながるとてもよい例だと思った。本校でも参考にしたい。

（Ｅ班：星峯中　益満　裕美）

・学校運営協議会の委員の人選も大事だという話が出た。評価項目を精選して敢えて項目を少なめにするこ

とも必要かもしれない。また，評価項目１つ１つに設定している理由を付けるのもよい。

（Ｆ班：生冠中　柿元　真一）

・本校の取組として，学校運営協議会の委員５名を入学式で紹介したり，３年生の面接指導で面接官役を担当してもらったりしている。会長には体育大会・文化祭で全体に講評をしてもらっている。年５回の会以外にもどんどん学校の中に入ってもらう形をとって，委員に生徒たちを直接知ってもらうよき機会としている。

【指導助言】

県教育庁教職員課小中学校人事管理係主幹

毛利　真吾

校長先生方が各校の課題に対して，一生懸命取り組む姿が見えて私個人が刺激をもらった。

・　国の第４期教育振興計画がR5.6月に示され，それをもとに県でも教育振興計画の検討･策定が行われ，R6 年からスタートしている。(既に校長先生方においては，地域の実態・課題を踏まえた上で本計画の内容を GD や経営方針に反映された方もいらっしゃることだと思う。)

大きなコンセプトの１つが，ウェルビーイングの向上であり,「誰もが豊かさ･幸せを感じられる地域」を創造していくことが求められている。この大コンセプトに関連し，学校運営協議会（CS）や外部評価を通して，学校が地域や家庭と一体となった活動を展開すべきことを国では５つの基本方針の１つとして，県では開かれた学校づくりの中で，地域ぐるみの安心・安全な環境づくり例として示されている。いずれにしても，学校運営協議会(CS)については，その制度化の推進が今後も続いていくのは間違いない流れである。

現状としては，小中･義務教育学校でのCS導入率はR6.5.1現在で本県６３．８％。全国６５．３％であり，国としては県立学校にも広げていきたい意向とのことである。

・　本日の発表１校目，坊津学園はCS導入して長くなってきての課題が見えてきた例であった。

１２年目として何らか課題が生じてくるのが必然なのだが，校長先生のCSへの思い「郷土を愛する子の育成」がしっかり外に発信されていて，それに地域が反応しているように感じた。郷土連携ができているし，組織が詳細に作り上げられ，確立していて，目的が明確でしかも持続性があるという理想的な状態が維持されている。課題があるとしたら，学校の小規模化でＰ戸数減少により，地域と学校の間をつなぐ役目をしてきたPTA活動の活性化くらいか？つまり，PTA 会員でない人を学校に入れる取組でもある CS 活動は今後も期待大である。学校職員側の問題としては引継ぎの難しさが挙げられるが，坊津学園ではそれもクリアし，校長先生が地域の要望の中から「無理のない，持続性のあるもの」を選別しているとのこと，先見の明が生きていてすばらしい。

・　２校目の発表，祁答院中はまだCS導入してそこまで長くはないところでの課題が見られた例である。外部評価に着目していたが，この作成において最も熟議すべきは学校・地域が目標やビジョンをどれだけ共有できるかにある。Ａ校では陳情書，Ｂ校ではCS への職員の積極参加推奨，Ｃ校ではCS が評価しやすい評価項目への見直し，それぞれに校長先生が地域の実態を見つつ課題にしっかり取り組んでいることが伝わる具体例であった。地域と共通目標を持った，真の連携が取れている証拠とも言える。

（記録　入来中　石畑　浩一）